

教育の原点

本 田 三 男

昭和四十年代、大学が休暇に入ると島根に帰省する為何度となく可部の町を通ったものだ。当時の可部は、大田川橋を渡ると田畑が広がり、今では想像も出来ないのどかな田園風景の味わえる町だった。

恥ずかしい話である。八年前武田学園に赴任して来るまで、この町に大学がある事を知らなかった。ましてや、ひたすら命を教育に捧げ教育一筋に生きる女性が存在するなどとは夢にも考えなかった。

昭和六十一年四月一日。この日が故武田ミキ先生に初めてお会いした日であった。場所は当時の学長室。文学部棟二階の部屋だった。

学長は背筋をぴんと伸ばし、物静かに机に座っておられた。八十四才の年齢を少しも感じさせない不思議な迫力があつた。あの日の学長室での光景が、今でも脳裏に焼きついていて離れない。

「三十九才ですか。働き盛りですね。一言申し上げます。私学は親方日の丸ではありません。私学には建学の精神があります。先生には先生のお考えがおりでしょうが、この精神は尊重して戴きます。」確かそんな内容だったと思う。建学の過程、それに伴う御苦労など知る筈も無い私には、厳しい言葉だと思われたのをよく覚えている。

一、大学人としてともに生きて

だが、文教での生活に慣れるにつれて、また教授会の席や学科会、チューター会の席で、学長の話を耳にする度に、あの日あの場で学長が語られた言葉の持つ意味が、次第に理解出来るようになって来た。学長こそまさに建学の精神そのものだったのだ。今思えば、学長に取って、一日一日が御自身の教育理念実現に向けた、残された貴重な日々であったに違いない。

私が着任した当時、広島文教女子大の学生数はすでに増加傾向を見せており、教員組織も大きなものになっていた。したがって新任の私が個人的に学長の教育理念をお聴きするなどという事は殆ど無かった。ただ四年前一度だけ、新入生に対する学長訓話の場に同席する機会があった。

訓話の中に、「世界に冠たる日本女性の育成」とか「世界に誇る日本女性の美德」等の言葉が現れた時には、正直いって驚きもしたし、はたしてこれらの言葉が現在の学生の心にどの程度伝わるだろうかと疑問にも思った。しかし同時に、単なる表面的言葉を越えた何かがある。聴く者の心に響く真実が含まれている。そう感じたのも事実だ。

昨年飛鳥法隆寺が世界文化遺産に指定された。その法隆寺の保存と修復に命をかける八十五才の宮大工棟梁西岡氏の言葉に、「工人が十人いれば十考あり。それらをついにまとめる徳が無ければ、棟梁を去れ。」とある。数千年も生き抜いた桧に学び桧に生きる氏の言葉には、思わず襟を正さずには聞けない真実の重みを感じられた。氏はまた「信念が無ければ、生木に刃物など入れられません。」とも言う。達人のみが語れる言葉だ。

通勤途中の車の中で、ラジオから流れる彼の言葉を耳にした時、私はこれこそ故武田ミキ先生の人生ではないかと考えた。桧を人間に置き換えれば、彼の人生はそのまま先生の人生に重なる。先生は揺るぎない信念と熱い情熱

で、自らの教育理論を実践し続けてこられた。しかし学生達を目の前にした時、先生もまた、生木の前に立つ西岡氏と同じ思いを感じておられたのではなからうか。それは畏怖心にも似た強烈な使命感だったのでなからうか。

その思いがあったから、人を魅了してやまない先生の、教育者としての人生があったのではないだろうか。

何があっても人を育てたい。人を生かしたい。この思いこそまさに教育の原点なのだ。平成五年の年の瀬も押し迫ったあの日。葬儀の場に何人もの卒業生の姿を見た。その中には私が送り出した女性たちの姿もあった。先生の言葉が伝わるだろうかと危惧した私の心配は見事に外れた。先生の「心」はきちんと彼女たちの心に届いていた。

先生の御冥福を心より祈る。